



Title	シュテファン・ゲオルゲ研究 : 伝記(5)
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 1963, 14, p. 167-184
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80233
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シュテファン・ゲオルゲ研究

伝記 (5)

八 木 浩

Stefan George

—Sein Leben (5)

Hiroshi Yagi

Umriss

Wenn sein Land in Not gerät, dann erst tritt die eigentliche Innerlichkeit des Dichters zu Tage. Von da aus versteht sich das wahre Dichtertum Georges. Während bisher Boeringer und Gundolf dafür heranzuziehen waren, kommen nun zwei neue wichtige Zeugnisse zu diesem Thema hinzu. Einer ist der kürzlich erschienene Briefwechsel zwischen Gundolf und George, das andere das Gespräch Vallentins mit George. Der stille und reine Dichter wird vom Beginn des Ersten Weltkriegs an immer zeitkritischer. Im Krieg und nach dem Krieg ist er wirklich zeitnahe und Prophet. Dem nach zu urteilen, was George in der Krise geäußert oder geschrieben hat, kann man den Dichter einen Humanisten nennen, der seine Wurzeln in die Bereiche von Vergangenheit und Zukunft geschlagen hat.

Der Riss zwischen George und seinen Jüngern, der schon um die Jahrhundertwende zwischen Schuler und Klages zu einer Katastrophe geführt hatte, wird um diese Zeit immer grösser. Seine Meinungen trennen sich nun auch von denselben der vielen Freunde wie Wolfskehl, Gundolfs und Wolters' und hier zeigt sich die Größe des Dichters. George in Mitte seiner Schüler ist nicht mehr statisch, sondern ganz dynamisch. In seinen Aussagen über etwas Wichtiges vertritt er den Standpunkt, daß die Zeit sich bewege. Sein platonischer Kreis, seine Lebensweise, seine objektive Geschichtsphilosophie, seine reale Betrachtung der Wirklichkeit, seine positive Äusserung über den Kommunismus, seine unentfremdete Beobachtung der zivilisierten Welt, seine prophetischen Gedanken über Staatsformen und Preussentum—alles das zeigt, welch ein lebendiges Dichterbild George seiner Zeit bietet.

グンドルフ・ゲオルゲ往復書簡は、1913年にグンドルフとゲオルゲがイタリア旅行したことを伝えている。この年の11月ゲオルゲは母を失った。大戦直前、1914年3月にもゲオルゲはハンス・ブラッシュとイタリアに旅行している。暗影に富む、牧歌的な海岸線、幻想的な漁村カモグリィで、彼は「海の子たち」を詩作したのであろう。毎朝彼は山の岩塊の下の橄らん林まで散歩した。

白くふちどられ きざはしなす前山の
かんらの銀色の葉を通して
生動する緑の波、光る帆船。

詩人はこのような風景、南方の気高さ、節度について語り、南方が歪められて伝えられていること、ヘルダーリンが正しいことについて語った。ヴァレンチンが伝える通り、ゲオルゲにとって風景はまた歴史なのである。「偉大な三人目の予言者は、ここから遠くないところにいたのだ」とコモグリィの丘をさし、そこでツァラツストラの筆をおろしたニーチェを回想した。しかし彼は決して風景におぼれてはいなかった。グンドルフはこの年6月にこう書いている:「男、女、聞き手10人。一度お話いたしますが、ロマンチックな夜で、殆んど芝居に出る夜さながらでした。」クライスはこのころ、グンドルフ、ヘリングラート、ハイヤー、ザーリンなど、たびたび集って、朗読会、演技会、シェイクスピア上演に興じ続けたが、ゲオルゲがこれにくみすることとはなかった。イタリアから帰り、グンドルフのゲーテ講義を聞きにきたころ、若い人のこのような楽しみにこたえて、ゲオルゲは歌っている。

君たちはそんな若者を奴隷だといえ……

遠方の雷鳴は彼らの耳にとどかない……

すでにゲオルゲは1905年の手紙で、第一次大戦を予言している:「戦争は両者の何年もの無意味な経済拡張の終局段階なのです。若干の人間がつぎはぎしても余り効果がないのではないのでしょうか。さらにおもうに、ドイツ人の純粋な友としてわれわれは、ドイツ人の手痛い敗北を希望してもよいのではないのでしょうか。そうすればドイツ人はいろんな国民間の謙虚さを学び、精神上の価値をあらたに生みなおす能力を再び手に入れることでしょうに。」このホーフマンスタールに出すはずだった手紙は、10年後の大戦のときのゲオルゲの気持と全く同じである。またヒットラー直前の死のころも変らなかった。ドイツの現代の社会学者テオドル・アドルノは、ゲオルゲ論でこの書簡にふれ、ゲオルゲの社会性を分析した。政治詩人でないゲオルゲが、このような洞察力を持っていたことは、真正の詩人、真正の言葉がまだ生きていたことの証拠だといえる。美的即非社会的という考えは現代文芸学のナンセンスな作りものである。ゲオルゲは大戦を予感

し、そのことで涙がかけられるまで悩んだ、と自らをカッサンドラになぞらえて歌っている。若い人々は、それに耳を傾けたためしがないというのである。

戦争についてのゲオルゲとゲオルゲクライスの考えの差は、いちぢるしく大きい。ヴォルフスケールがロマン・ローランにあてて公表した1914年秋の手紙を、戦争肯定の響きがあったため、ゲオルゲは全くうけつけようとしなかった。グンドルフあてに彼はこう書いている：「私は君の政治上の発言に賛成できません。ドイツの国策の限りない馬鹿らしさが、この戦争をこんな危険にさらしています (Eine maasslose dummheit der deutschen staatskunst hat diesen krieg so gefährlich gemacht)。そしてこの愚劣さが、いくところますますひどくなるでしょう、しかし私のもとには入るすき也没有。君がフランス人への怒りでのべていることは全く非政治的です。どんなドイツ人のもとでも、(ろばのところでさえもそうですが) フランス人にたいする徹底した憎しみなど聞いたことがありません。君はその点で無類です。それはそうと、ヴォルフスケールのロマン・ローランに対する返答を読みましたか。もちろん彼は、フランス風であるのみでなく、全世界、いや最上のドイツ人をも支配する人間的で感傷的な狭さがあります。こんな傾向は、戦争がすむと、多くのことが片づかぬうちに、また同じ臭い失敗へ、いや悲劇的結末へとつづいていくのです。将来くる、本当の敵と悪魔をくみふせる世界に属している人が、まだ誰も口を開いておりません。」グンドルフ、ヴォルフスケールよりも、ヴォルタースの方が、より烈しくゲオルゲの戦争観と対立していた。ヴォルタースはたとえば、このように考えたのである：「フランスは、これまで見たこともない大きな呪いをせおっている。フランスは血統相姦をおかし、その血は黒や茶色の外人の体の液でまじり、アフリカの熱夢の毒をとり入れ、異国の奴隷を同血族諸民族にけしかけ、その代価でけがれた旗にうわべの勝利をかざった。」ゲオルゲの詩にある血の考えは、このような偏狭な憎悪や、独善的なものではなかった。後年ゲオルゲが、ヴァレンチンなどにヴォルタースのこのころの考えを厳しく戒めているのも、もっともなことである。「マイスターは、ヴォルタースとエーリカが戦争をドイツ最大のできごとのようにいった開戦当時のことにふれた。『私はそのころ沈黙したが、それはそうするように強いられたからなのだ、どうなるかはすべてわかっていた。今日になってみんながやっとわかってくれる。グンドルフもだ。そして最後に妄想からはなれてくれたのがヴォルタースだ。』」もっと若い人との間にもくいちがいがあった。たとえばザーリンは、このような対話を報じている：「何か意義のあることがおこったとでもいうのですか。きっとタンネンベルクだということでしょう。群なす兵士があてどなく戦ったからといって、どこに意味があるというのですか。レオニダスとともにたおれた300のスパルタ人は、われらの力のシンボルをつくりましたが、それは彼らが群ではなくて、へ

ラスの力と信仰が沈黙した小さな塊りとして、ベルシヤの群に殺され、しかもうちかったからなのだ。」

アウシュヴィツ、広島、長崎以来、私達にはこのような問題が余りにもわかりきったことになっているが、当時はまだそうではなかったのである。トーマス・マンですらあやまった第一次大戦観を持っていた。ヴィルヘルム帝国をこきおろしたマックス・ウェーバーでさえ、チャンスがきたとばかり熱狂した（ペーリンガー）。ドイツの社民党ですら、戦争に反対する態度を崩し、勝利をめざすことにふみ切った。シュテファン・ツヴァイクの「昨日の世界」（原田義人訳）はこう伝えている：「ほとんどヨーロッパ人としての訓練を受けていず、全くドイツの詩園に生きていた詩人の多くは、戦争の外見的な美しさを詩的な呼びかけや学問らしいイデオロギーで基礎づけることによって、彼らの責務の最善をつくすのだ、と思っていた。ハウプトマンやデーメルを先頭に、ほとんどすべてのドイツ詩人は原始ゲルマン時代のように弾唱詩人として、前進する斗士を死の感激に燃え上がらせる義務があると感じたのである。Krieg, Sieg, Not, Todと韻をあわせた詩が多くふりそそいだ。」ツヴァイクの言葉、「広いヨーロッパ的教養」という点で、ゲオルゲはマイスターであったといえる。ブラッシュによれば、ゲオルゲは国民について、価値尺度をあてたことがなかった。彼が文化圏について引いたことがある線は、地中海であった。古代から光を伝えるところ、ワイクセル川に至る全欧は、協同の母胎に根ざす白色人世界なのだ。彼はそれと並べて、優劣なく、インドや東洋にふれた。好戦的なドイツ人は、作家ですら、フランスやイギリスとは文化協力しないことを誓った。一夜あけると、彼らは英仏文化があったことすら認めなかった。しかし、ボードレールとマラルメの国、シェイクスピアの国を、どうしてゲオルゲが忘れえたであろう。かみあう常であるけものが、戦争の叫びをきいて集ってきた、というゲオルゲの詩と同じことを、ツヴァイクはこのようにのべている：「これまでにないくらい、幾千、幾十万の人人は、平和なときにもっと感じていなければならなかったこと、すなわち彼らが一つであることを感じた。200万の一つの町、5,000万の一つの国は、再びめぐってこない瞬間を相ともに体験しているのだということ、各人はその微少な自我をこのもえている群衆に投じ、そこであらゆる利己心から自己を浄化するのだということ、こんなときにあって感じたのであった。」ゲオルゲはこのような団結を狼にたとえた。ゲオルゲの少さいが深い友情は、平和の中のいとなみであった。ツヴァイクのいう「文化に対する不快感」は、そこにはいる余地がなかったのである。それは法律や規則をおちこわし、太古の影響下に帰ることだ。ゲオルゲのいう形式や精神はそんなものと関係がなかった。ゲオルゲは人が血を叫ぶときに愛を、人が愛をとえるときに魂をよびさませた。グンドルフ書簡集は、あの力作「戦争」が戦時中に出版されたいきさ

つを伝えている。1917年にゲオルゲはこの詩の出版を強行し、レジスタンスをこころみたのであった。ボンディ書店が六週間内に出すといったのに対し、ゲオルゲは電報でもしすぐ出版されないときは別のところで刷るとおどしている。仲介の労をとったグンドルフは恐縮し、新聞にのせなかったら本屋の注文がこないから、とボンディに説得、またゲオルゲに、スイスで出版するのはやかましく騒がれてよくないという説明をしている。もしそうすれば反独に利用されるではないかというのである：「ドイツのために書かれたものは、ドイツの心臓から出ていくのです。……雑誌で何かありませんか。……むしろ新聞にのせましょうか。あるいは号外にしましょうか。」ボンディは早く出すと無許可出版物だから外国で売ることが許されない、という損害を遂にあきらめて、この詩を出版した。エーリヒ・ベーリングガーはこの詩を一足さきに暗記して、国境をこえ、ラントマンのもとで書きおろして伝えていった。8月にグンドルフは、ゲオルゲにあてて、この詩の輸出許可があり、大いに読まれていると伝えている。

ブラッシュの報告によれば、戦争が長くなるにつれ、ゲオルゲは憂愁にとざされ、誰一人戦争の停止を考えないことを悲しみ、訴えた。彼はグンドルフにも、戦場の友にもそのことを公然と書いている。彼は愛国主義の口調で話したことがなかった。彼がよくのべたり書いたりした主張は、本当に人間的でドイツ的なものが結晶した人人の結束を、戦場ですら保持することであった。しかし、たれにも明らかになったことは、それがドイツの勝利と平行するものではないということである。戦争たけなわのころ、プロシャ批判は遠慮なしで、もしドイツが勝つとどんなに危険か、ということがしばしば語られた。Heldentumとは死の用意なのでなく、死の前でも精神を荒廃させないで保持することなのであった。ブラッシュは戦争中ゲオルゲが不気味だったという。それはドイツ人の大事が彼にとり、とるにたりないものだったからだ。それはまた彼が、遠いさきをみているように思われたからであった。しかしゲオルゲは号外を買いに走らせたりして、現実のことに常についていき、国民とともに歩いているようであった。これは精神の島で、クライスのたれにもわからないほどむづかしく感じられた。詩人の心はよりかたくなり、顔は黄色みを加え、髪は白くなった。50才の詩人ははや額のしわを深め、口角に苦痛を深め、殆んど笑うことすらできないようだった。死ぬ友の悲哀に耐え、未来の困難に耐え、ユートピアを見ずに、ドイツの現実に入った彼は、最初から終りまで、平和締結の必要を認め、エルザス、ロートリンゲンをあきらめよ、そうすればドイツはより偉大になる、とおよそドイツ人の理解できないことをのべた。人が勝利の夢に酔っていると、勝利など役に立たぬ(Kein Sieg hilft)といい、ドイツ人に必要なものは世紀の変りめからきまっている、といった。ドイツ人同志の偽瞞の申し合わせで平和が結べないのだ、大軍を戦場に送る方が平和な政治をするよりも弱者にとって

はやさしいのだ、とかいった。1917年ゲオルゲはグンドルフにヴォルタースあての手紙をこう書かせている：「戦争から遊離しているとあなたがいわれる友達、事実をゆるがせにしている人々のようにみえますが、しかしゲオルゲの考えでは、この遊離という危険はそう重大事ではないのです。もっと困るのは、別のもので、今日の現実を忘れるという危険です。50年後に世界が急に無意味やうわべや愚昧さから、偉大な、英雄的なものに変わったりできますか。あなたの巨人主義は万物が新しい力で魂を吹きこまれるといいますが、魂をふきこまれないものだってあるのです。それらを滅ぼすというのですか。そうもしないと機械まで神的にしようとするような、最も恐ろしいことになるでしょう。」ゲオルゲはヴォルタース風の巨人主義や未来の理想主義を最も強く戒めた。彼の言葉はこのようなとき稲妻のようであり、難解であった：「一体わずかな高められた運命的瞬間がわれわれを転化させうるなどという考えは何とつまらないことだろう。一体今日の市民は1914年のときとどこがちがっているのか。……戦争が新しい人間をつくるとてもいえるのか。……永久に価値のあることがおこったといえるものですか。大衆が目的もなしに戦ったとあって、どこに意義があろうか。」ショーナウアーは1917年の新年のゲオルゲの手紙をかかげている：「あなたがたほとんどすべてが始めに戦争の直接的な意義を過大評価したことを今はっきりしておかねばなりません。戦争のうちに古い世紀が狂いつつ亡びていくでしょう。戦争によって新しい世紀が押し出されてくるでしょう。しかしそれは外面的精神が現代考えているように、決して戦争の内的本質からではないのです。」ヒンデンプルクなどから救いはこない、政治、外面からでなくて、内から、というゲオルゲの考えは、「勝利者は中核に守護像をいただくもの」という一行によくあらわれている。

大戦中ゲオルゲはよくマインツにきた。そこへ戦争にいく友や、戦争から帰る友がたちよった。彼はすぐれた若者を求め、彼らを正しい生に導びこうとした。ソクラテスのもとにくる気持で彼のもとにきた若い人々は、彼の愛を身近かに感じた。新しい友として、たとえば、エーヒッヒ・ベーリングー（Erich Boeringer）があげられる。また彼らはよくベルリンにも集った。場所はトルメーレンのアトリエだった。彼は1914年にできたこのアトリエにイタリアから帰って以後おちつき、ここで四囲から隔絶された生活をした。フリーデマン、ヴォルタース、モルヴィツなどどこを離れてから戦場にいった。このころ彼はまたグリュネヴァルトのボンディ家にも住んだことがあった。ゲオルゲはこのようなアトリエにきては詩作して去ったが、1918年からはこのアトリエにこなくなった。手術後階段を登れなくなったためである。彼の考えは若い人に理解されなかったし、詩集「約束の星」も誤解されたが、それにもかかわらず、誰もがみなゲオルゲを仰ぎみて、不動の信念をよみとろうとしたらしい。ハンス・カロッサはそのころのゲオルゲのこ

とをかいている：ある日隣室からひびきゆたかな巾のある声がきこえてきた。それはゆるぎない一人間が騒がしい世の中の人間の立場を規定しているのであった。そこでゲオルゲはカロッサの友人グレックナーに親しく教をのべていた。「この高名な教師のゆるぎない調子と、ときに口をはさむ門弟の間、街では秋の木の葉が紅に燃えて静かにふりそそぐ中を、軍楽につれて、花に飾られた新鋭部隊が陸続と停車場に向っていた。のちに私はアカデミーについて論議されるのを耳にするたびに、この日のことが思い返された。そしてこのような制度は、こういう対話から出発すべきではないかと思われた。事実ゲオルゲは対話を通じて助言することにより、どれほど多くの有能な若い人人を鞭撻し、各各の道を歩ましめ、いかに多くの人人をその各各の使命へと導いていったことであろうか。(若林光夫訳)」ゲオルゲが一生用いた方法是对話であった。「われわれ老人も勇気を失わない、若い人も失うな」(Wir Alten halten den Mut fest, verliert Ihr Jungen ihn nicht!) といって、若い人人に危機の面倒をみたのである。このような対話がどういうものか、われわれは体験することができない。しかし最近出始めた対話集からすると、どうも当時の人人、これまでの学者は、いちぢるしくゲオルゲからはなれており、そのために自分の都合のいいように学んできたのではないかと思われる。戦争についてのゲオルゲの考えも、最近漸く輪郭がつかめはじめたといえるほどなのである。不完全だが当時の若い人人とゲオルゲの関係を示す例をひろうこととしよう。ベルンハルト・ウクスクル (Bernhard Uxkull) にゲオルゲは次のような手紙を与えている。「援助を必要となさるようですから、手渡された御手紙に御返事申しあげます。あなたのお手紙には無秩序な、濁ったまなざしがのぞいています。だが現在逃げ道などありません。現在静かな島など決してないのです。たとえ逃げたところで長続きしません。一切はゆっくりと混乱にひき込まれることでしょう。私はそれをよく知っています。昨年三ヶ月スイスにいましたが、何とかもったいなかったのです。しかしそうしませんでした。自分にそういいかせたのです。そこにいる方がずっとよかったのですが、しかし、もしそうしたとすれば多くのものが、そしてあなたも、存在しなかったことでしょう。」われわれが島にこもり、因果の現実を望見するのみなら、一切は存在しない。宿命はのがれてはならぬ。ゲオルゲが社会主義の詩人のように動けなかったという限界はあるにしても、「われわれ」というものを見失うまいとした努力は、はっきりとよみとれよう。このウクスクルとアーダルベルト・コール (Adalbert Cohn) は、芸術草紙に属していたが、こうして励まされ、友情につながれて出陣した。ゲオルゲはそれを記念して Victor und Adalbert という題を付した詩を作った。彼はまた、この件が友情の存続のあかしだとのべた。そしてまた、「私なしに自ら自身であった最初の二人」と讃えている。彼らが戦死したことは、彼にとって筆舌につくせぬ痛手であったが、一つの永遠

の友情が輝き出たのである。ゲオルゲはまた、いつも仕事について教えることをやめなかった。1915年5月のベルンハルトの兄、ヴォルデマール・ウクスクル (Woldemar Uxkull) にあてた手紙は次のようである：「あなたのこの間の詩は大変私を喜ばせました……若い人の仕事は最も純粋な感覚をそなえていても欲するものを完全に包みこめていません (jenes ganzpacken des gewollten)。それはひどく厳しい訓練 (äusserst strenge zucht) によってえられます。詩の評価にあたり三つの観点が区別されます。一つは造形し見渡す衝動 (der drang zu formen und zu überschauen) です。これはあらゆる精神的な人が持つものですが、これだけではまだ詩精神をそなえたとはいえません。……第二のものは特別な詩的な動態 (das besondere dichterische bewegtsein) です。それができると、ただわずかなことがのべられていても、聞くに値いするものになります。第三のものは最も大事なもので、私の対話はいつもそれで終わっています。思い出して下さい。基礎構造の定着です (die festigung des unterbaus)。」ゲオルゲはどんな時がきても、未来の仕事のことを考える精神あるいは技法を守ろうとした。このような気持をもっともよく体得した人として、ヴォルフガング・ハイヤー (1917年戦死)、ハインリッヒ・フリーデマン (1915年戦死)、バルドウィン・フォン・ヴェルトハウゼン (1920年戦病死) などがあげられる。ヘリングラートもまた従軍し、武器をとった。極端なまでに兵士らしくない彼は、長い不安に巢喰われ、死の影に脅かされ、「体中が生にぶらさがる」といていたが、一旦休暇がとれると、Ich bin ein armer überrest von Deinem Norbertといていたのに、早く戦場にいかうとする他の人人とちがいで、急に仕事にかかり、ヘルダーリーンについての二つの講演を行った。そこには感動的な信仰と希望があふれている。彼はドイツ人がヘルダーリーンの国民として作用する日を待つのみである。そしてその生き生きした未来のため、現代に対して少し疎遠なだけだ。こうして彼は何百年かあとの神秘的なドイツの母胎にさかのぼり、自ら平静をえた。内面的に一つの冷静さをえて、未来への生から、もう生きたという感情 (das gefühl, gelebt zu haben) をえて、平静に戦火の中に立ち、他の将校をおどろかせる。「感情が何だというのか。そして今が何だというのか。のろろ進んでいけば、遂に霧が立ちのぼり、もうろうとした光の中に戦後の大きな仕事の光が見えてくるというのに。」というのが最後の手紙であった。そして1916年12月ヴェルダンで勇敢に散った。生を惜しみ、仕事を愛し、真に勇敢であったヘリングラートは、こうしてゲオルゲを深く悲しませ、その胸から美しい八行詩を迸らせたのであった。

戦争についての若い人とゲオルゲの関係を最も正確に知るためには、グンドルフ・ゲオルゲ書簡集がよい。今迄のべたその他の諸関係はすべて輪郭程度しかわかっていないのである。グンドルフという有名な文芸学者がゲオルゲと戦争について交わす手紙は、ゲオルゲの偉大さをますます

す高めるばかりである。1914年になると、ひらきのなかった師弟の関係に、急に対立が生じ、一面に緊張が漂ってくる。戦争こそドイツの大事と何度も書くグンドルフに、ゲオルゲは知らぬ顔である。「仕事、おしゃべり、遊びはおしまい、空虚さよりは戦慄の方がよい。この瞬間、われわれにとって永遠だったものが、亡ぼされたのではなく、確認されたのです。小さいつまらぬことの上へ、巨大な戦慄がきたのですから」と書くグンドルフに、ゲオルゲは冷たく、Nichts wird so heiss gegessen, als es gekocht wird. と答える。熱狂するグンドルフはさらにドイツ人の勝利こそ急務と書き、(Denn eh die Deutschen gesiegt haben, hat nichts einen Sinn und Bestand, was man denken und sinnen kann, und alles Tun hat nur die Eine Aufgabe, siegen um jeden preis!) ドイツ人こそ真正の徳をそなえた国民だと書き、また戦争でドイツ人が新しく生まれなおしたなどと書くが、ゲオルゲは冷たく、Wenn stetigere zeiten kommen erwart ich ihn in Berlin. と書き、また、グンドルフが自分で悟らないことがわかってきたのか、より鋭く、「手と足の仕事のときは頭を高くかけよ」という(Haltet die KÖPFE hoch denn die sind nötiger als je, wenn arme+beine ihr werk getan haben)。グンドルフが戦争に感激しているさまに対してはこう書いている：「だが感激だけで事物は生じません。君が感嘆するさまを私はまたびっくりしている。……若い人を私は愛してはいますが、戦場に行くのをとめはしません。そこには、われわれすべてが共有している宿命があるからです。だが結構な突進だけを愛するのではなく、国民の未来の運命を配慮する者なら、もう今日から未来の予測に立って一切を考えねばなりません。」これに対してグンドルフは、ゲオルゲの考えを変えるつもりの手紙ではなかったと弁明して、やはりドイツこそ一切という流行のイデオロギーをなおすてきれない。ドイツ流政治の愚劣さと、ロバでもフランス人の悪口をいわぬということをしるした前述の手紙が、漸くグンドルフの反省を生んだ。しかしその代り戦争に見られるドイツ人の気高さを讃えるという、ドイツ的内面性の欠陥に、グンドルフはとじこもる。1914年10月のゲオルゲの手紙は更に鋭い：「何という愚劣さ、何という不完全さが知識人の間にあらわれたことだろう。若干の人間が一億の裁判官づらして僭越なことだと思われましたが、やっぱりそうなのだ。なぜまた戦争や行為のようにむきだしにリアルにやるのだろう。どんな陣営からでもよい、一億の中から、一つのこと足る精神の声をききたい。たれ一人としてきこえないとは。」これは93人のドイツの芸術家、学者の戦争のためのマニフェストに対してなげつけられた言葉である。グンドルフは何とかゲオルゲの考えと通じたく思い、ヒンデنبルクのアネクドートや彼の戦争への配慮をたたえている。1916年のグンドルフの出陣は、ゲオルゲの心をくもらせる。彼はゆるすことができない：(mein kind ich kann nicht zulassen dass du wirklich den äussersten gefahren

ausgesetzt wirst—was soll ich denn ohne dich?). しかし戦場に出たグンドルフは、フランスから戦争の肯定面を書きつけている。とくに共同生活のすばらしい面とか、ドイツ人の特性とか、教会的なきびしさとかをほめて、「政治のことはしらない」とか「何をなぜかはとわぬ」(einerlei was und warum) とかいった。こうしてグンドルフの中には、とうとう完全な疎外、すなわちあやまった内面性がはびこっているといえる。ヒンデンプルクへの愛着、森の中を進軍する情緒、ひきさらう命令の美化、戦場のクリスマスの涙などがグンドルフの一切なのである：(Auch hier bin ich nicht außer dem Zauber und außer dem Wunder, wieviel auch Betrieb und Unsinn, Dummheit und Wirrsal diesem Weltereignis abhängen.)。長く戦場で耐えられなかったグンドルフは、ベルリンの事務局に移されたが、その偶然をゲオルゲは戒めている。「助けてもらうよりは、耐え通すことが人間らしいという悪状況があることに覚悟をきめる時代だと私は思います。このような時代には、めいめいが、このわれわれ自身の決断のみが、生を断てといいかねないような状況で生きていよものか、可能なものか尋ねねばならぬときがやってくるかもしれません。われわれはストア主義の説教師であったことはありませんが、君の手紙からは、波に浮く一切を味わってみようという気が伺われ、それが、われわれがこれまで生きてきた、正しかった生活と決して相容れない対立を示しています。」クライスの中で最もゲオルゲが愛したグンドルフのこのような行為と文章の破綻は、クライスとゲオルゲの絶望的なへだたりを充分に伺わせる。ヴォルフスケールやヴォルタースとのへだたりはもっと大きかったのである。ゲオルゲがリアリストだったという同人のしばしばのべた言葉は、これらの状況からすれば、うなずけないことではない。

ゲオルゲは1913年11月「約束の星」から10篇だけ公開した。ここでは大戦の予感がよくあらわれていたが、1914年さらに全篇を公開、「本来もっと秘すべきものであったが」とことわっている。数により整頓され、1,000行の詩の各篇は10行前後で、10篇のうち9篇は序、1篇は結び、3書各30篇で、詩脚はヤンプスまたはトロハウスである。ここでゲオルゲはマクシミンの理念を歌い、時代の法廷に立ったのである。これらの詩はドイツの破局と再生を予言する。深い個性に基づき、謎をひめ、ワイマル共和国やその崩壊や、危機や、そのさきのことまでも予言されている。一切を持ち、一切を知りつつ、人は人でなく、機械化し道具化し、世界の破局を導く者にあつらえむきになっている——誇張とみなされたこれらは、すべて真実だったし、また事実となった。すべての人がまだ幸福そうにみえる時、きたるべき世界についていうことは、大変むづかしいことだ。そしてここで、詩人が手厳しく裁いたことに、罪をきせ、顔をそむけるのは、大変やさしいことなのである。戦争直前の墮落した世の中で詩人が予言したこれらの資本主義、帝国主義、唯

物主義、逃避主義、審美主義の誤りは、今日なお、よりよい世界をつくることを思わねばならぬものにとって、貴重な教訓となるのである。ここで人間と社会、内面と社会が、どのようにしてより高次のハーモニーに至るかについてのマクシミンのゲオルゲの考えは捨てがたいものとなる。ただしこの書は、全くプラトンのエロスで読まれなくてはならず、もしそうしなければ奇妙な解釈をしてあやまるのである。この詩集は当時から今まで誤解されつづけているが、それは思うに、われわれが未だこの詩境に成熟していないからなのである。この詩集ののち3年間沈黙したゲオルゲは、1917年先述の詩「戦争」を出した。これは明らかに反軍国主義、平和主義の詩集であり、精神的に戦争の基礎をとらえて攻撃したものであった。戦争の権力欲、利益欲、享受性、利己性をえぐり出し、そこに神がないことを宣言、これまでのどの戦争とも違うものであることを示した（Der alte gott der schlachten ist nicht mehr.）。勝利や歓呼の無意味、資本主義への斗争……それらの宣言にもかかわらず、ゲオルゲの転身は誤解されて、あたかも芸術のための芸術の詩人であるかのようにいわれたのであった。なぜならこのような歪曲は、きたるべき時代の根本的な特色なのである。

ゲオルゲはこのようにいった：「われわれの人生は安住できるものとはなりえません。のちの時代の人ならまた宮殿に住めるかもしれません。われわれの時代は基礎づけの時代です、テントの時代です。今日宮殿を建ててもなんの意味もありません。そこに住むのにふさわしい人は一人もいないからです。同じような理由から、寺院を建てようとするのもっと馬鹿げています。まずわれわれ人間がわれわれの土地で成長せねばなりません。そうしてこそ確乎として家をたてることができることでしょう。われわれにはまだそのような家が与えられていないのです。しかし、さかんな日々には人生のいただきにのぼり、その想いが明るい人の目にわかるように、灰色の壁におりこまれている人々のたくさんの運命を想うにつけても、このかりそめのテントは永遠のものといえます。もしそこへ無関係な者らが押し入ってきますと、その魔術は砕け、尊い杯がこなごなになって、もう味わえなくなるのとなっています。それゆえにまた、ここで堅固な人生のあかしであったこれらの木の安ものの道具類は、この空間から魂が去れば、どこかよそで見劣りする奉仕をすることすらしないもので、砕かれ、焼かれてしまうことでしょう。今やどのような不安な時代が始まるか、知れたものではありません。おそらくわれわれすべては、この混乱にあって亡び去ることでしょう。だがかって本質的に存在したものを、誰一人奪うことはできないのです。」（ショーナウアー）晩年のゲオルゲの言葉は、もはや詩人の国をめぐるものではない。「戦争」の詩で彼ははっきりと、未来の国は詩人の国ではないと考える。詩人は未来の国を準備し、またその国に役立つ人を育てる。大戦ののちのゲオルゲは、新しい国に想いを寄せ、社会主義、

ナチ、宗教の争うなかで、静かにそれを成熟させていく。しかし、それは余りにも質的にむつかしく、余りにもテンポがおそく、「新しい国」という本が出るときには、はや時代はますますゲオルゲの想いから隔たりつつあったのである。ゲオルゲのまわりにいた人すらも、またその例外ではなかった。それでもゲオルゲは、プラトンのアカデミーともいうべき、粗末なテントの中の本質的存在への追究をあきらめず、くり返してその話をした。もちろん彼の精神主義は社会主義とナチズムの間に迷う若人に、大きな魅力を及ぼした。それはこの現実から距離をとってレアリズムをのりこえ、しかも大きな未来を前にしているかのようであったからである。学校、研究所、両親、教会が与えぬものがそこにあるように思われた。全く自由に生きて構わなかったゲオルゲの安定感が、ますます彼らに目標に向かって進む感激を与えたのである。グンドルフが彼にヘリングラートと連絡しようか、と書いた時の彼の返事は、書く必要なしという簡単なものである：Wenn der kleine Hellgrath sich nicht meldet, so braucht man ihm nicht mehr zu schreiben. しかし、トールメーレンの音信がたえた時のグンドルフあての彼の手紙は、「こんなにたくさんの人がなくなっていくと考えると、悲しみのうちでも最も悲しい気持ちにおそわれる」となっており、複雑なゲオルゲの悩みが伺えるのである：「魂が再び濁ったというのでしょうか。魂はプラトンの言葉を何重にもきもに銘じねばなりません。すなわち第一段階は美しい肉体への愛であり、より高い段階は幾つかのより美しい肉体への愛であるということです。」大戦前から成熟したこのような想い、物質の世紀に貧しい魂の輝きを求め、そのような精神の団結を考える計画は、若い人々にとり、ときには不可能なユートピアのように思われた。100年前ならヴィンケルマン、ヘルダー、ゲーテ、ヘルダーリンのもとに可能だったかもしれないが、今日そのような光が残っているだろうか。大都市の没落に陥ったわれわれには、なぜギリシャ人が青年に愛情をあんなに多く捧げたのかわからないのではないか。そのように疑いをはさむ者にゲオルゲは答えた：「それは不思議ではない。……狐か狼が挨拶するようなところにいて、ぶあつい頭、鼻の上の眼鏡で、ビールをのみ、学生の前段階のような先生しかみたことのない生徒のことを考えてみなさい。その子は彼らをみて、たとえ健康な感覚を持っていたとしても、決してよいものを見たりはできません。だが自然は、われわれのもとでは、法則が適用不足で失効するほどまで、乏しいとはいえません。そしてわれわれ、人間の成長開花を知っている者は、大きくなる若者が生まれつきの美を保持し、嘔吐を催す生活にけがされぬように、乱用の刻印が顔に押されぬように配慮せねばなりません。」このようにゲオルゲは、神聖な義務、祝福について語った。

残念なことに詩人の健康はすぐれなかった。1915年に詩人を襲った病は、1920年に再び襲い、大きな手術をせねばならなかった。同年のエーリカ・ヴォルターズの手紙は、かなり大きな腎臓

結石の手術の経過を伝えている。その後の詩人は著しく衰えて、死の影を宿すように思われた。散歩も友人の腕にもたれてできたにすぎなかった。「あなたは私の誕生日の近さをおもい、52才になるとお思いでしょう。しかし、そうではありません。その倍も年とっているのです」と告白している。さらにこの療養生活で彼の心を最も深く悩ませたのは、扱いがたい、急速なテンポで進むドイツの暗黒への道であった。忠告しても無駄だ、みんな私のいうことがわかっていないのだ、とつぶやいて、病人が健康な友を悩ますことがしばしばであった。それにもかかわらず、世の人はこの高次な精神に異常な視線を向けた:「早くふけていった、いつもどこかの蒐集でみたオランダ老婆や、福音の使徒ヨハネを思わせるゲオルゲが通りかかると、お客のさざめきが低くなり、またとなりの者の腕をあれみよと知らせるようにつづく者もあった(カロッサ)。」 1919年から1931年の間に詩人が好んで訪れたところは、アレキサンダー・チョッケ (Alexander Zschokke) のアトリエであった。当時25才であった彼は、そのころのことをいろいろ伝えてくれる。樅の粗末な机とベンチのあるこの室が詩人の気に入った。ここで原稿が朗読され、訂正され、一同が話し、論じた。2時間ほどの笑いとフモールにみちた時間だった。出席者は12人から14人で、それぞれが長所を発揮した。特に詩人は、人々に知られていない面、すなわち、現実に対する畏敬の心を表したと伝えられる。例えば、よりすぐれた者であろうとする試みはすぐ粉碎された (glaubt nicht, dass ihr zu wichtig seid)。25回もゲオルゲの頭部をデッサンしたチョッケが、ある時、ギリシャ人の眼がわれわれに具っていないと嘆いたが、即座にゲオルゲはこう答えた:「たれもが今見ている通りにギリシャ人をみているのではないか。たれも皮膚でみれないのです。」あきらかに彼は、アトリエで眼の世界を保持しようとした。1927年からAchillionというアトリエにいたが、ヴァレンチンの対話では、これまでのアトリエと断絶するつもりで居所を変えたことが伺われる。ゲオルゲは、ブルジョア的な、学問的なアトリエでは詩を語らぬことにしたといっている。新しい部屋の呼鈴は、打合わせておいた鳴り方でないと、詩人に通じなかった。女も家族もそこにはいなかった。若い友人が二人いて、料理を調えた。その生活は朗らかで真剣で、全くプラトンの饗宴であったと伝えられる。彼の言葉は難解で、へだたりゆく若者に意味深い謎のようにひびいた。夜がくると車で、どこかにいったが、のちにワルター・ケムプナーのところであったことがわかった。詩人の悩みが何であったかは、最近出たヴァレンチンなどの対話集がよく伝えてくれる。それは意外にも現実的なワイマル共和国に関する、全般的な問題であったのである。1920年前後に彼のクライスに引き寄せられた人は、ペルシイ・ゴートハイム (Percy Gothheim) とエルンスト・カントロヴィツ (Ernst Kantrowicz) くらいであろう。グンドルフ・ゲオルゲ書簡は、ゴートハイムとの関係がマクシミン、グンドルフ関係に次ぐ

関係ににていることを示しているが、今度は失望の色が更にこいものであった。ゴートハイムは草紙に詩を寄せ、1939年にはTyrannisという詩集を印刷、強制収容所で死亡した。カントロヴィツの方は、生きた直観力、男性的でかつ優雅な精神を具え、詩や歴史にすぐれ、フリードリッヒ二世の研究で有名になったが、追放にあって消えていった。1919年の写真では、ハイデルベルクに集ったゴートハイム、グンドルフ兄弟、グレックナー、ヴァレンチン、W・ウクスクル、E・ベーリンガー、モルヴィッツ、トールメーレンがみられる。これらの人々を見て、特に一流の人といえぬとか、師以上の人はいないとか、木に竹をついだ (George pflanzt Eichen in Stock-scherben) とかいう人もある。ゲオルゲ自身はこれについてこう答えた:「私はここにいる人々を選ぶほかないのだ。ここにいない人々とは何も始めることはできない。」シュタウヘンベルク兄弟に至るまで、その才能や正しさで、ドイツ精神に寄与したクライス同人の数は、めざましいものであるにしても、あきらかに詩人は、天才に出あうというイデーを捨てていったのである。天才は作用する者 (ein Wirkender) であり、奇蹟的に出現する。「それは不動の確信を持つ者で、今日の事情からすれば、最良の人間ですら第二級の人間として育つのだ、ということを考えねばなりません。」何という現代の透視であろう。だが若い人は、時々最高の存在に高まりゆくものだと過信し、われら三人は選ばれた者 (Wir drei sind auserkoren) というような詩句さえあった。しかしゲオルゲは、人々の高さを現実 に即して敬った。彼はさながら詩人の国から出た用心深い庭師だった。種子をわけ、陽と水をわかち、雑草を除き、病をいやそうとした。ザーリンのいうように、彼はプラトンがソクラテスについていった言葉、人間の中の最も正しい者 (der gerechteste aller menschen) に値いした。高度な正義をもって、彼は国家を形成する訓練を行った。どんな中傷も防禦も、この裁きを前に防ぐすべがなかった。グンドルフの再婚事件をめぐる手紙はこのことをくまなく証明している。年間報告も、プログラムも、法文もない共同体がどうしてなりたつのか理解に苦しむ人々の好奇心のまとだったクライスの本質は、ゲオルゲの具体的な愛以外のなにものでもなかったのである。彼はあらゆる友の思考と力と目標を助成し、親に会って子との喰い違いを調整し、学校教育との間の矛盾をならした。例えば1910年にグンドルフの父が死んだ時のゲオルゲの手紙は、「私を必要とするとき手紙するように。半日といえども、一人になった母を淋しがらせるな」と書いているのである。

このような愛は、大戦前から一つの時代的な信念にまで高まっていた。ヴェルヴェイに反対してゲオルゲはこういった:「以前に私があなたのところにいた時、あなたはいいました:時代を注意しないでおくことはよくないと。本当にそうです。ドイツでは現在、人生と精神のあれやこれやの多くの流れがありますが、われわれはそれらを整理すべきです。人は真に働くべき道を示

すべきです。私の道はしかし、好まれやすい文明のモダンな道ではありません。私は別の、内面的統一を欲します。その道で私はわれわれの世界へ近づいたのです。以前に私は世界に圧迫されそうだと思いましたが、今はもう恐れを抱いておりません。人々と状況に対する私の関係は変わりました。それらの人間関係は今もきっと変わらずに存在しますが、以前よりずっと多く注意されて、個々の人に対しては昔と同じ親しさにはありません。」大戦がすむと「精神」への不信を抱くグンドルフに対して、ゲオルゲは厳しい内面の道を教えようとしている:「今日ほど輝かしく豊かな、ガイストの時代があったろうか (Eine glänzendere und reichere zeit für den geist ist also nie gewesen als die heutige)」。しかしグンドルフは19世紀のガイストを考えてそれが崩壊したといっている。もちろんそれはもうとっくに終わっている。」数百の昔の論争は別の照明をうけねばならない。一切は新しくガイストによって生み直され、生きられなくてはならない、とゲオルゲはいう。一体ゲオルゲがこのころ新しいものというのとは何か。彼の対話や手紙から考えるに、それは歴史をどう見るか、にかかっているように思われるのである。信念の強い晩年の国家観、学問観、文化観、自然観などを思うにつけて、それらの基礎にある歴史観が目立ってくるのである。一つは客観性豊かな歴史観である。グンドルフが、ユダヤ人が神を、ギリシャ人が文化を、ローマ人が国家を見出したとのべたところ、ゲオルゲは、「哲学を三頁に縮められようが、歴史はできない」と戒めた。グンドルフは主観から歴史と人間を説明したが、ゲオルゲはいつも客観的な方を主張した。彼はさらに、現代の課題を、20世紀の根本性格、ニヒリズムの克服に見たと考えられる。ニーチェは、19世紀を18世紀が骨抜きにされたものと見、その成果をゲーテでなく混沌、ニヒリスチックな溜息、行方と場所の喪失、18世紀へバックする疲労した体と批判した。これにゲオルゲは大変同感し、ニーチェは大部分の大きな本質をつかんだといっている。しかし、ニーチェはギリシャ人、特にプラトンを誤解し、プラトンの神を理解しなかった、と詩人はいう(グンドルフ書簡1910)。詩人のこのような考えは、晩年になるにつれて信念となった。ニヒリズムという現代観と、それを救うプラトンの愛の福音という信念が不動のものになったさまを、晩年の手紙はよく示している。1922年のE・グンドルフあての手紙は、シュペングラーの本が完全にニヒリズムの本だと否定し、F・グンドルフがこんなものに感心したのを手厳しく責めているのである。歴史をこのように客観的に見、現代をニヒリズムと断定、それを明るいプラトンの愛で生きようとするこのような希望は、ゲオルゲに残されていた現代のただ一つの可能性であったのである。これに対し、キリスト教的な恩寵についてはどのように考えたであろうか。現在にしっかりと立ち、未来をめざすのみならず、過去をもしっかりとつかむ強大な精神であったゲオルゲは、やはり恩寵についても暖かい共感をもっていたように思われる。1920年に、クライスは

善を体得した人が恩寵から見捨てられるかについて論争した。そこへ入ってきて、その問をきいた若い人が、否と答えた調子に、ゲオルゲは感動していった：「各自の欲する通りに信ずればよいのだ」と。思うに信ずるということは、ゲオルゲにとって窮極のものであったのであろう。

歴史は二つの力の対決である、というような考えすら、ゲオルゲにないではなかった。それが一つはプロシヤ的なものへの批判となり、もう一つは共産主義の批判となったのである。そして1930年に近づくとナチズム批判となった。ゲオルゲは少なからず政治家としての素質を持っていたが、あくまで詩人であったので、彼自身が働きかける空間をつくり、より大きな空間に作用するのをあきらめた。彼は1920年にグンドルフにいった：「詩人と行為者は別者だが、詩人と観察者はわけられない。」それに対してグンドルフは、「あなたは行為者です、自分でそれがわからないだけです」といった。行動的な人間としてのゲオルゲ、観察者としてのゲオルゲ、詩人としてのゲオルゲの三つは、晩年においてわかちがたい全体をなすのであるが、特に観察者としてのゲオルゲがわれわれの注意をひくのである。大戦前からしばしばプロシヤ的なものにゲオルゲは反感を表明した。彼がのこした叙事詩、「ライン」の断片は、赤白黒のプロシヤの旗を帝国主義の工業と象徴させている：der schutt von rötel, kalk und teel. 彼はまたビスマルクまたはプロシヤを批評した詩のプランをねっている：

この神聖なローマ帝国の墓穴に
この帝国を建てたのか、中心に
軍隊と商人の 奴隷の冷い町を？
所有欲と怯懦とうつろな光の
魂のない何十年もの先ぶれとなり？
父祖の夢にならい山が開かれたか？
主人から奪い ずる賢く工夫したものは
狭められはしないが 全民族の
模範にと お前が獲たもの
愚かに になったものは もぎとられた。
お前はつかんだ、が遠くへとどかず、
歎いたが 勇気は足らず、瀆神の行いは
ドイツ人は神を恐れる！ということにした。
いつも打ち、だまし、戦って勝ち、故郷で
平和のうちにたおれ、夕方前に早くも

愛する小舟が砕けるのを見た。……

われわれの血を高める歩みや感動は

お前になかった。コルシカの慧星に

驚嘆したわれわれを強いる言葉もなく、

権力あって気高い自由な手はなく、

位をおろされると沈黙の誇りもない。

召使いになろうとする者——それ以上によい

墓碑銘をお前のために誰が見出せようか。

この詩は大战後のものではなかろうか。ショーナウアーは大战前の作かもしれないといっている。戦争に行かぬかといわれた詩人は、黄色の猿でもくればいってもよいかと答えた。彼はいった：「プロシャ主義の悪影響はあらゆる物分りのよい人なら認めるだろう。それは非常に有効で、かつあらゆる芸術と文化の敵というべき制度である。」「小国は精神的なものを、たえず内外の防禦にあせて平静を獲難い大国よりも、たやすく形成することができる。」「ドイツということにたえず注目した国民詩人が、このように自国の支配勢力を拒否し、ドイツはすなわち非ドイツ化するところに育つと語り、君達の戦争にあづかりしらずと歌ったこと、決して根なし草でなかったこのドイツ詩人が、フランスやロシアやポーランドについての否定的な表現を耳にすると烈しく怒ったということは、注目すべきことである。ザーリンが、ポーランド進軍の際、ポーランドの文化程度の低さが目についたという、ゲオルゲは激怒して、第三第四指の間にはさんでいた煙草を鞭のようにふり、「何と愚劣な雑談だろう。友達のパクロー一人でもそんなきまり文句の仮面をはぐに充分な人だ。ポーランド人やスペイン人の中にいるあんなに多くの生まれつきの貴族をドイツ人の中に見出しえたら、こんなに苦しんで君達を教育することなどいらないだろう」といった。しかしヴェルサイユ条約の前後、外国、とくにフランスの無礼さについても、これに劣らず烈しい言葉をはいたと伝えられている（ザーリン）。要するに戦争は人間に無益なのだ：「戦争が新しい人間をつくるというのですか。一体何か永久に価値のあることがおこったというのですか。大衆が目的もなしに戦ったといって、どこに意義があらうか。」彼にとり敗北は、第二帝国が陥るべき当然の帰結だった。悲しい誇りをもって、賤民が未来の民になるなどという希望を軽蔑し、ヨーロッパの中のドイツの位置を敬虔にとりあげなくてはならない。ゲオルゲは新しい権力者に対しては、余り好感を抱かなかったが、それでも彼らは昔の階級を打破したのであって、この点で共和国に鞭うつ將軍や封建的人物よりは好感がもてた。また彼は、単純で飾り気なく、勇敢につき進む新しい指導者に常に敬意を忘れず、共和国の始め数年間、プロシャの臣従から解

放されて、人間が人間として話すことができる自由が生じたことを楽しんだ。彼は戦争によって大きな犠牲を払ったが、同時に新鮮な内面の国をうちひらいたかのようにであった。ヴェレンチンの対話は1920年前後、しばしば共産主義の可能性をゲオルゲが考えていたことを伝えているのである。このドイツをゆるがす大事件にゲオルゲは決して無関心ではなかった。「紙のような政府のもとで、こうしてゆっくり破局に近づくよりは、あらゆる関係の力ずよい転覆があった方がよいといえるくらいだ。」「私はソヴィエットの行方をいつも大きな関心で見守っている。」「私は共産主義者よりもより共産主義的だ。」同時に彼は、自分がどんな保守主義者よりもより保守主義的であることを認めねばならなかった。一体新しい文化、人間性が、ソヴィエットに育つか否かが、彼の関心のまところである。それは理論でなく実証の問題なのであった。プロレタリアがもつ文化の可能性を彼は決して否定しなかったが、まだまだむつかしいのではないか、と思い、むしろその証拠を求めつけざるを得なかったのである。「ソヴィエットからまたブルジョアが出るかもしれない。新しい人生の炎こそ問題ではないか。」ゲオルゲがもし社会主義文化の今日の興隆を見れば、別のいい方をしたはずである。さらに彼はアメリカにも大いに注目したが、その文明と技術の傾向に、より手厳しい批判の言葉を浴びせている。観察者としての詩人ゲオルゲは、こうして決してアウトサイダーではなかった。彼は過去にもさかのぼり、プラトンの国家観に注目、近代に彼の国家体制循環説があてはまるといった。彼は専政に移行せぬかと最も恐れ、「君主政体と民主政体ののちに最も怖ろしい専制政治がくるかもしれぬ」といった。「デモクラシーはこれまでのところビザンチニズムに終わった。」彼の結論は常に一つのところに帰っていく：「あらゆる国家形式はそれをになう人間と等価です。私から八方にデモクラシーは通じているが、ただ精神的な領域では求められないものだ」（肉体的ということをゲオルゲは強調している。）改良か沈黙かとゲオルゲはいう。同時代の学説に対する彼の攻撃も、実はそこに根ざしていたのであった。しかし時代は、黙々と改良して人間の本質を高めるという詩人の努力とは、ますます離れていくのであった。